

原本玉篇の江戸期写本 – 巻 19 残巻の錯簡について

鈴木俊哉[†]

概要: 日本に断片が残る原本玉篇は、現在では散逸した典籍の引用も多く、逸文を収集する材料としてのデジタルテキスト化が大きな課題である。江戸期写本には羅振玉や東方文化叢書の影印では既に失われている部分が残っているため、江戸期写本の関係の分析が必要である。巻 19 残巻について他本と異なる錯簡を持つ島田篁村旧蔵本に対し、小助川 1991 の手法を適用して調査した結果、錯簡の状況は異なるけれども、共通の祖本がある可能性が高いことがわかった。

キーワード: 原本玉篇, 古逸叢書, 江戸期写本, 島田篁村, 海保漁村, 玉篇真本水部攷証。

Transcribed Copies of Yupian in the Edo Period – Confused Order in Volume 19

suzuki toshiya[†]

Abstract: The remained fragments of the Yupian have many quotations from the lost Chinese Classic texts and are useful as the resource to collect them. Therefore, the digitization of the searchable text is an important task. Although Tōhō Bunka Sōsho photo-reprint is regarded as the most truthful reprint of the original material, some transcribed copies in the Edo period include extra fragments which the Tōhō Bunka Sōsho reprint lacks. Therefore, it is needed to study the transcribed copies in the Edo period for better coverage. In this report, the copy owned by Kōson Shimada including an exceptionally confused ordering at volume 19 is studied, and it is found that its source is similar to the other copies with differently confused ordering.

Keywords: Yupian, Guyi Congshu, Kōson Shimada, Genbi Kaiho, Gyokuhen Sinpon Suibu Kōshō.

1. はじめに

梁の顧野王が編んだ字書『玉篇』は、字書の見出し字を小篆から楷書に切り替えた大きな転換点である。現在全体が残るのは北宋初の陳彭年による『大廣益會玉篇』(以下、宋本玉篇)だが、見出し字の追加と注文の短縮がされているため、唐代に参照されたものとして扱うことはできない。

宋本玉篇以前の状況を残すと思われる断片は日本にいくつ残っている。これらの断片は正確に梁代のテキストと断定できるわけではないが、宋本玉篇に比べて注文が長く、現在は散逸した多数の典籍から用例を引いている。清光緒年間に黎庶昌・楊守敬が『古逸叢書』¹の中でそれらを『原本玉篇』として模刻出版した後、狭義の「原本玉篇」はこの日本残存断片を指すようになった。

『古逸叢書』は、日本残存典籍を写真撮影して模刻したとよく言われるが、原本玉篇の場合は写真から模刻したのは巻 18 後分と巻 27 前半だけで、多くは江戸時代の模写本(以下、江戸期写本)から模刻した。それらの江戸期写本がいつ頃成立したものか不明なものも多いが、後の羅振玉や東方文化叢書による影印では既に失われた部分も含まれる。できるだけ原本玉篇のテキストを広く集めようとするならば、資料原本だけではなく、江戸期写本にも参照すべき部分があるので、それらの参照関係の解明も課題となる。

2. 巻 19 残巻の原本について

江戸期写本や古逸叢書に含まれているが、資料原本が失われた(あるいは行方不明になった)部分の一つとして、巻 19 残巻の冒頭 26 行部分がある。古逸叢書編纂時に巻 18 後分の原本を所持していた柏木探古は、その時点で冒頭 26 行部分と残り 127 行部分とが断裂しており、127 行部分が東大寺尊勝院(巻 18 後分の旧蔵者でもある)に残るとしていた(柏木 1882)。127 行部分は藤田家に入り東方文化叢書による影印に収録された。一方 26 行部分はさらに断裂したらしく²、前半は昭和初期に川瀬一馬が大槻家より入手し安田文庫に入ったが(川瀬 1937)、戦災によって焼亡した³。後半は長く行方不明であったが、2015 年に高田時雄氏が湖北省博物館の楊守敬旧蔵資料から発見した(高田 2018)。

この 26 行部分よりもさらに前の部分、および、127 行部分よりも後の部分についてはいつまで残っていたか明らかでないが、大居司氏によって、断裂の原因となった折本装の時期には現存するよりも広い部分がまだ残っていたことが報告された(大居 2020)。

3. 江戸期写本に関する先行研究

原本玉篇の原古写本に由来するテキストの研究に比べ、江戸期写本の研究はそれほど活発ではない。小助川 1991 が

[†] 広島大学総合科学部

¹ 本稿の本文では基本的には JIS X 0208 の範囲で表記するが、模写本に見える字形を示すには ISO/IEC 10646:2020 の CJK 統合漢字の範囲に拡大する。それに見えない場合は ISO/IEC 10646 の IDS 表記または外字を用いるが、外字で示した文字図形は外字であることを示すために赤字とした。強調の意味ではないので注意されたい。本稿の外字の一覧およびフォント

は https://glyphwiki.org/wiki/Group:mpsuzuki2_BrokenGlyphs-YuPianTranscripts@37 から得られる。

² 柏木 1882 では自身がこの 26 行部分を所有すると書くが、その真偽には疑問が残る。長澤 1940, 高田 2018, 鈴木ほか 2020 を参照されたい。

³ 川瀬は、自分が安田文庫を離れる時もこの断片は安田文庫に残し、焼けてしまったと書く(川瀬 1994, p.135)。

高山寺所蔵の巻 19 の模写本(以下、高山寺本と呼ぶ。高山寺は巻 27 の原古写本の断片を所蔵するので、これとは別であることに注意されたい)について影印および古逸叢書本(以下、古逸本と略す)と詳細なテキスト比較を行い、高山寺本には誤写は多いが意図的な校訂は少ないため、校訂が多い古逸本よりも原古写本の状況を推測するのに適切な材料であるとされた。また、行款が古逸本と一致することから、その底本となった模写本は高山寺本と近い関係が疑われると指摘した。

一方、浜田 2008 は多くの江戸期写本の巻 09, 27 の書き入れを比較し、その関係を調べた。その結果、古逸本のうち少なくともこの 2 巻に関しては、伴信友本を祖とする模写本の系列であることを明らかにした。

高山寺写本は巻 19 しか無いため、浜田 2008 の分析の中にはそのままでは組み込めない。鈴木ほか 2020 は浜田 2008 の手法を巻 19 に適用して、高山寺本、山田以文本、森立之本、伴信友本、黒川春村本、田澤仲舒本、足代弘訓本、島田篁村本、静嘉堂本、大東急本を調査した⁴。その結果、古逸本もやはり伴信友本を祖とすると判断した(高田 2018 で報告された楊守敬旧蔵の断片は、校正材料としては利用された可能性があるけれども、基盤ではないとする)。

巻 19 の書入れの分析では、写本間の差異について巻 09, 27 のようなはっきりした系列差は見えず、浜田 2008 で既に明らかにされていた伴信友本グループ以外は、参照関係もはっきりしていない。ただし、多くの模写本が同一の錯簡を持つのにに対して、足代本と島田本は他本と異なる錯簡を持つ。足代本は他の江戸期写本では冒頭 26 行部分について他本と同様の錯簡を持つが、行款も他本と異なるうえ、127 行部分にも錯簡と脱落が見える。そのため、調査対象の中では足代本は伝抄の世代としては最も後と見られる。一方、島田本は冒頭 26 行の錯簡が他本と異なり、伝抄された系列はもっとも早く分岐したものと推測した。

3.1. 巻 19 江戸期写本に見える錯簡について

巻 19 残巻の冒頭 26 行は、以下の 4 つの部分からなる。

- 断片甲: □～湛の 11 行、見出字 10 字
- 断片乙: 濞(湛の古文)の 1 行、見出字 1 字
- 断片丙: 湮～瀑の 12 行、見出字 11 字
- 断片丁: 涓～潦の 2 行、見出字 3 字

このうち、安田文庫に入って焼亡したのが断片甲であり、高田 2018 が報告しているのが断片丙・丁である。

この 4 つは、宋本玉篇や篆隸萬象名義から考える限り、甲・乙・丙・丁の順序で並んでいた筈であり、古逸本でもそのように彫っている。しかし現在確認されている江戸期写本は島田本を除き全て丙・甲・乙・丁の順序になっている(以降、この状況を丙甲乙丁錯簡と呼ぶ)。長澤 1940 は多くの江戸期写本が同一の錯簡を示していることから、原本に錯簡があったと考えたが、池田 2017 は東方文化叢書の影印から原紙の幅を調べ、もし原本に錯簡があったとすれば、その幅が原紙の幅に対して短すぎることから、原本にはこの丙甲乙丁錯簡は無く、1 葉あたり 12 行の行款の模写本に書き写された後に発生したものと考えた。この直後、高田 2018 によって断片丙・丁が実際には断裂していないことが報告され、錯簡の起源については決着したと考えて良いだろう。

小助川 1991 は高山寺本が 1 葉あたり 12 行という行款で

あり、綴じ順を誤れば丙甲乙丁錯簡が生じることを指摘している。山田本も同様の特徴を持つことは長澤 1940 も既に指摘していた。森立之本、伴信友本、また大東急本などは錯簡の境界が頁内に来ているので、既に錯簡を持つ写本から模写されたと考えるのが自然である。従って、高山寺本と山田本は他の丙甲乙丁錯簡を持つ写本よりも一段階古い世代の様子を残すと期待できる。

長澤 1940 と小助川 1991 の推測の違いは図 1(a), (b) のようになる。ここでは錯簡なし写本は未発見としたが、高山寺本か山田以文本のどちらかが、補修の際に初めて錯簡を起こした写本である可能性は今排除しない。鈴木ほか 2020 では、古逸本は伴信友本に基づくとし、図 1(c)のように古逸本は 1 葉 12 行でないさらに後の写本から模刻したと考える。島田本のみは、別の系統と考えるわけである。

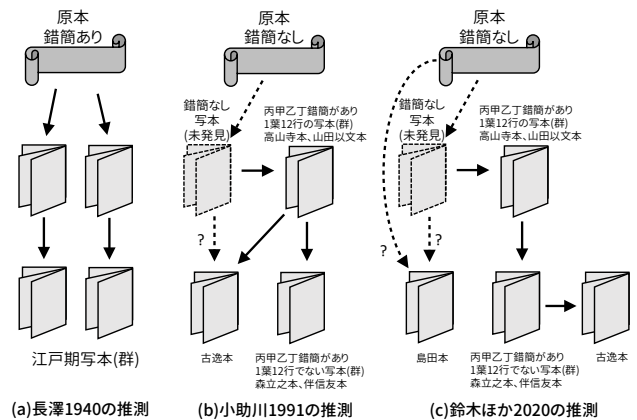


図 1: 江戸期写本群の派生関係と、錯簡の起源の想定

3.2. 島田本の祖本と本稿が扱う問題

ここで、本稿の主題である島田本の錯簡について整理する。島田本は、まず断片丙・丁が冒頭にあつて 127 行部分が続き、最後に断片甲の途中までが模写されている。島田本は 1 葉あたり 10 行で書写されているので、断片丙・丁の境界は同一頁内にある。この循環的な錯簡を見ると、島田本は丙甲乙丁錯簡が葉の境界とずれている伴信友本や森立之本のような写本から派生したものと考えるのは難しい。鈴木ほか 2020 では図 1(c)のように島田本は高山寺本・山田本以前に分岐した系列と考えた。1 葉あたり 12 行の模写本において、第 1 葉・第 2 葉が入れ替わると高山寺本・山田本のように丙甲乙丁錯簡が生じるが、第 1 葉を最終葉の後に回すと島田本の状態になる。ただし、島田本は行款が異なるので、再度模写を経ないと現在の形にならない。また、この共通の祖本が存在せず、原本から独立に書写された資料という可能性もある。本稿では、小助川 1991 で調査された原本・古逸本・高山寺本で差異がある部分について、他の江戸期写本の状況を調べ、島田本の祖本の様子を考えたい。

4. 調査と考察

4.1. 対象

本稿では、江戸期写本としては高山寺本、山田以文本、島田篁村本、森立之本、伴信友本、黒川春村本、田澤仲舒本を調査した。詳しい書誌情報については浜田 2008 および鈴木ほか 2020 を参照されたい。

調査範囲は、小助川 1991 で影印・古逸本・高山寺本 3 者

⁴ 各写本の呼称は旧蔵者名(不明な場合は現蔵機関名)により、必ずしも作成

者を指さない。

で差異があった151箇所である。ただし、高田2008ではじめて写真が公開された断片丙・丁部と、見出し字と注文の字形に違いが見つかった15箇所を追加し、合計で166箇所を比較した。

このうち、黒川春村本、田澤仲舒本は伴信友本を祖本とすることが既に判っており(浜田2008)、伝抄の過程でどの程度字形が揺れるかを見ることができる⁵。

4.2. 結果

調査結果を表1に示す。以下では、江戸期写本と古逸叢書の模刻本を合わせて模本と呼ぶ。

表1: 小助川1991で比較された箇所以外の江戸期写本での状況

- **小助川番号:** 小助川1991別表1での通し番号。本稿で追加したものは、検索の便を図りその出現位置の直前の番号に枝番としてローマ字を付加している(たとえば012aは本稿で追加したもの)。
- **見出字:** 原本玉篇の見出し字の、対応する宋本玉篇での字形。原本玉篇での見出し字と完全には一致しない。たとえば「汜」は原本玉篇も模本も全て「汜」に作る。
- **江:** 高山寺本、山田以文本、島田篁村本、森立之本、伴信友本のうち影印本と符合しているものの数。全て異なる場合は「×」、すべて符合する場合は「○」とした。伴信友本から模写されたことが判っている黒川春村本、田澤仲舒本は含めないことに注意されたい。
- **島:** 島田篁村本が影印本と符合する場合は「=」を示す。
- **影印:** 川瀬1935、高田2018、東方文化叢書の状況。比較で注目する文字以外は灰色で塗っている。見出し字を問題にする場合は1字のみ示す。ただし断片乙部に関しては影印が無いため、古逸本の状況を書いた。
 - ▶ 注文の文字の有無が異なる文字は [] で、書入れ字は<>で、見せ消ち点が付加された文字は日でくくる。
 - ▶ 影印で文字が虫損している場合、当該部分を⊕で表記する(模写本ではしばしば虫損を図形として描く)。文字の一部分に虫損があつて図形部品として同定できない場合、IDSに⊕を含める場合がある。虫損でなく、汚れ等で判読できない場合⊙で表記する。
 - ▶ 文字のあるべきところが空格である場合(空)で表記し、前後の文字が詰めてある場合は(+)で表記する。
- 古逸本より右の欄では各模本で注目する文字の部分のみ記す。当該位置が資料に含まれていない場合、斜線をひく。

小助川番号	見出字	江	島	影印	古逸叢書	高山寺	山田以文	島田篁村	森立之	伴信友	黒川春村	田澤仲舒
断片甲部												
001	汜	3	=	古文為没字	字	宗	字	字	字	字	字	字
002	泗	○	=	泗	泗	泗	泗	泗	泗	泗	泗	泗
003	游	2	=	在冫部	冫	𠂔	𠂔	冫	冫	冫	𠂔	冫
004	砵			以衣 ⊙ ⊙ 為砵	涉水	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)
005	砵			權舟 ⊙ 以横砵	杭	𦨭	𦨭	杭	杭	杭	𦨭	杭
006	砵	○	=	礫石渡水也	履	礫	礫	礫	礫	礫	礫	礫
007	砵	○	=	礪在石部	(空)	礪	礪	礪	礪	礪	礪	礪
断片乙部												
008	湛			(散逸: 襄 ⊙ 昆陽縣)	陽	城	城		城	城	城	城
009	湛			(散逸: 有湛水入 ⊙)	汝	海	海		海	海	海	海
断片丙部												
010	休	○	=	君子休於口	日	口	口	口	口	口	口	口
011	休	×	=	不能自理出者也	自	白	白	自	白	白	白	自
012	没	○	=	失利<為>没	<為>	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
012a	没	1	=	賈逵日没貪也	貪	貪	貪	(空)	貪	貪	貪	貪
012b	没	×	=	古文為𦨭	𦨭	𦨭	𦨭	(空)	𦨭	𦨭	𦨭	𦨭
012c	決	3	=	決	決	決	決	決	決	決	決	決
012d	決	1	=	毛詩惟水決 & 傳𦨭 ⊕ 口 決	惟	惟	帷	帷	帷	帷	帷	帷
012e	決	3	=	毛詩惟水決 & 傳𦨭 ⊕ 口 決	決	決	決	決	決	決	決	決
012f	決	○	=	毛詩惟水決 & 傳𦨭 ⊕ 口 決	口	口	口	日	口	口	口	日
013	決	×	=	杜預日決 &	日	口	口	日	口	口	口	日
013a	決	×	=	杜預日決 &	決	決	決	決	決	決	決	決
014	涑	○	=	浦	涑	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦
015	瀑	○	=	冷風且瀑	終	冷	冷	冷	冷	冷	冷	冷
127 行部												
016	濩	×	=	尔雅	雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	雅
017	涿	○	=	涿水出成谷	上	成	成	成	成	成	成	成
018	瀧	3	=	瀧	瀧	龍	瀧	瀧	瀧	瀧	瀧	瀧
019	瀧	×	=	瀧涿猶瀨滯也	檣	檣	檣	檣	檣	檣	檣	檣
020	瀧	○	=	雨隴 & 也	瀧	隴	隴	隴	隴	隴	隴	隴

⁵ 黒川本は国会図書館にマイクロフィルムがあり、田澤本は非売品ながら影印出版がされているので、江戸期写本の中ではアクセスが容易である。静嘉堂本は伴信友本巻末の奥書を欠き、また木村本は狩谷本を使って増補

したと見られるので、伴信友本の単純な模写として比較するのはやや危険である(浜田2008)。

021	瀧	×	廣雅	雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
022	漆	1	漆浦也	沛	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦
023	漆	1	浦漆水波兒也	沛	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦
024	瀉	2	龍池曰瀉瀑瀉其隈	瀉	瀉	瀉	瀉	瀉	瀉	瀉	瀉
025	激	×	激	激	激	激	激	激	激	激	激
026	浞	1	廣雅	雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
027	濛	○	= 雨、濛、然也	(空)	々	々	々	々	々	々	々
028	濛	×	爾雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
029	濛	×	= 廣雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
030	沈	×	沈	沈	沈	沈	沈	沈	沈	沈	沈
031	沈	○	= 沈溺濕也	疾	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒
032	沈	○	= 濁甄也	甄	甄	甄	甄	甄	甄	甄	甄
033	沈	×	= 司馬彪	司	冂	冂	司	司	司	司	司
034	沈	×	陸沈於冂冂甘避	冂冂コ	也	也	也	冂冂口	冂冂ス	冂冂ス	冂冂衣?
035	涵	○	= 水澤名也	多	名	名	名	名	名	名	名
036	涵	1	在白部	口	白	白	白	白	白	白	白
037	渾	○	= 毛詩(フ)汾沮渾	彼	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)
038	漫	3	= 惟其漫矣	漫	優	漫	漫	漫	漫	漫	漫
039	漫	○	= 漫多也	優	漫	漫	漫	漫	漫	漫	漫
040	漫	○	= 漫清也	渥	清	清	清	清	清	清	清
041	漫	○	今並為漫字	優	漫	漫	優	漫	漫	漫	漫
042	漫	○	= 以和樂之憂為憂字	憂	和	和	和	和	和	和	和
043	濃	×	= 乃東冂冂反	反	冂	冂	反	冂	冂	冂	冂
044	濃	×	= 傳曰濃、厚也	日	以	ツ	日	冂	冂	冂	川?
045	涔	1	以簿捕取之也	簿	簿	簿	簿	簿	簿	簿	簿
046	涔	×	= 韓詩	韓	轉	轉	韓	轉	轉	轉	轉
047	涔	○	= 涔清也	漬	清	清	清	清	清	清	清
048	涔	○	= 涔湯浦在郢	郢	郢	郢	郢	郢	郢	郢	郢
049	渥	○	= 渥厚(フ)也	漬	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)
050	渥	3	渥淳漬也	厚	淳	淳	淳	淳	淳	淳	淳
051	淮	3	涓漬也	淮	涓	涓	淮	涓	涓	涓	涓
052	灑	3	= 雨雪灑、	々	又	々	々	々	々	々	々
053	灑	3	= 雨雪之盛	雪	霽	雪	雪	雪	雪	雪	雪
054	泐	○	= 石有時以物泐	(空)	物	物	物	物	物	物	物
055	濂	○	= 理兼理染二反	添	染	染	染	染	染	染	染
056	濂	×	薄水也	水	水	水	水	水	水	水	水
057	濂	3	= 太玄經	太	大	太	太	太	太	太	太
058	濂	3	= 王者之政太卒	太	大	太	太	太	太	太	太
059	濂	×	周礼為鑑字	鑑	鑑	鑑	鑑	鑑	鑑	鑑	鑑
060	滯	2	= 謂滯貨不隼	隼	隼	隼	隼	隼	隼	隼	隼
061	滯	○	= 沈滯於厘中	塵	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘
062	滯	3	= 敢告滯積	告	告	告	告	告	告	告	告
062a	漣	1	漣	漣	漣	漣	漣	漣	漣	漣	漣
063	漸	2	= 在三部	欠	三	三	三	三	三	三	三
064	瀾	×	= 郭璞曰	日	口	口	日	口	口	口	口
065	瀾	○	= 冬無(フ)	水	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)
066	瀾	×	即此類也	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)
067	汜	×	汽幾也	幾	幾	幾	幾	幾	幾	幾	幾
068	汜	×	廣雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
069	涸	3	= 涸	涸	涸	涸	涸	涸	涸	涸	涸
070	涸	1	廣雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
071	灑	×	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
072	漶	×	在宀部	山	山	山	山	山	山	山	山
073	消	1	消息為賊所得	賊	賊	賊	賊	賊	賊	賊	賊
074	渴	×	謂(空)湏飲也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也	謂(空) 湏(空)也

075	溼	○	=	苟(ナ)賤	有	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)
076	溼	○	=	苟賤(ナ)	工	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)
077	溼	○	=	濕恒憂也	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒
078	溼	×		秦晉之間	秦	秦	秦	秦	秦	秦	秦	秦	秦
079	溼	○	=	凡志而不得飲飲	(空)	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲
080	溼	×		潛恒之名也	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒
081	涇	3	=	凡羞有涇者	有	涇	有	有	有	有	有	有	有
082	汀	×		塞汀洲兮杜若	兮	子	子	子	子	子	子	子	子
083	洿	×	=	漢書洿行潦之水	洿	洿	洿	洿	洿	洿	洿	洿	洿
084	洿	×		歐豆兩	豆	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)
085	洿	○	=	歐白也	歐	歐	歐	歐	歐	歐	歐	歐	歐
086	洿	○		全隕為洿	隕	隕	隕	隕	隕	隕	隕	隕	隕
087	洿	×		廣雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
088	汚	○	=	舊染汚浴	俗	浴	浴	浴	浴	浴	(空)	浴	浴
089	汚	×	=	田卒汚萊	日	日	日	田	日	日	日	日	日
090	汚	○	=	川澤汚汚	納	汚	汚	汚	汚	汚	汚	汚	汚
091	汚	1	=	廣雅	雅	稚	雅	雅	稚	稚	稚	稚	雅
092	湫	×		有湫城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
093	湫	○	=	湫水在周也	地	也	也	也	也	也	也	也	也
094	湫	3		勿史有所壅閉湫底	使	吏	史	使	史	史	史	史	史
095	湫	×		血氣集滯	血	而	而	血	而	而	丙	而	而
096	湫	○		湫乎彼乎	攸	彼	彼	攸	彼	彼	彼	彼	彼
097	湫	3	=	湫然作色	作	(空)	作	作	作	作	作	作	作
098	潤	×	=	廣雅	稚	稚	稚	雅	稚	稚	稚	稚	稚
099	潤	×		廣雅	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚	稚
100	準	3	=	以準天地也	准	隹	准	准	准	准	准	准	准
101	準	○		<准>度也	准	(ナ)	准	准	准	准	准	准	准
102	灑	×		又有一灑	(空)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(空)
103	灑	×	=	灑、源	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
104	灑	○		<灑>	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)	(ナ)
105	灑	○	=	應其流	壅	應	應	應	應	應	應	應	應
106	灑	×		為灑魑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
107	灑	○	=	為灑魑	魑	魑	魑	魑	魑	魑	魑	魑	魑
107a	灑	×	=	為澤受灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
107b	灑	×		灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
107c	灑	×	=	說文灑灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
107d	灑	1	=	埤蒼為灑字在手部	灑字	灑字	灑字	灑字	灑字	灑字	灑字	灑字	灑字
107e	灑	○	=	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
107f	灑	×		說文灑灑也	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑	灑
107g	泊	×		泊	泊	泊	泊	泊	泊	泊	泊	泊	泊
108	泊	○		及鹽須澗水	泊	須	須	泊	須	須	須	須	須
109	湯	1		鄭之湯沐色也	邑	色	倉	邑	包	包	倉	倉	倉
110	湯	×		子之湯兮	兮	子	子	子	子	子	子	子	子
111	浼	○		以灰所浦水也	浼	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦
112	浼	○	=	財濕水也	音	濕	濕	濕	濕	濕	濕	濕	濕
113	汰	○	=	齊吳榜以激汰	激	激	激	激	激	激	激	激	激
114	汰	○	=	汰澨也	澨	澨	澨	澨	澨	澨	澨	澨	澨
115	澨	○	=	乾清米也	澨	清	清	清	清	清	清	清	清
116	澨	3	=	太妊娠	太	大	太	太	太	太	太	太	太
117	瀝	○	=	今瀝字也	瀝	瀝	瀝	瀝	瀝	瀝	瀝	瀝	瀝
118	浚	1	=	孔安國曰	曰	白	白	曰	曰	白	白	白	白
119	浚	×	=	尔雅亦云	尔	尔	尔	亦	尔	尔	尔	尔	亦
120	浚	×	=	桂預	桂	木	桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂
121	潘	×		燂潘諳顧	請	諳	諳	請	諳	諳	諳	諳	諳
122	瀦	○	=	記史	史記	記史	記史	記史	記史	記史	記史	記史	記史
123	瀦	2	=	考瀦	瀦	瀦	瀦	瀦	瀦	瀦	瀦	瀦	瀦

124	淤	1	水中六居者	可	六	六	六	六	六	六	六
125	滄	3	= 水无波也	尤	无	无	无	无	尤	尤	尤
126	滄	○	= 故魚鮪不滄(フ)之言閃也	注滄	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)
126a	淪	×	淪	淪	淪	淪	淪	淪	淪	淪	淪
127	淪	1	淪濟渙而注諸海	潔	渙	渙	渙	渙	渙	渙	渙
128	滌	×	測酒出也	側	則	則	則	則	則	則	則
129	滑	×	旨酒既滑	滑	滑	滑	滑	滑	滑	滑	滑
130	滑	×	= 不相比近也	此	此	此	比	此	此	此	比
131	洒	○	= 沈酒於酒	洒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒
132	洒	○	= 不出客日(フ)	[洒]	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)	(フ)
133	漿	×	水漿醴涼醫醴也	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼	涼
134	澆	○	= 澆清也	漬	清	清	清	清	清	清	清
135	液	3	= 吸飛泉微液(空)	兮	(フ)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)	(空)
136	灑	×	公道公禪二反	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪
137	漚	×	= 假以溢我	鍛	鍛	(不明) ⁶	假	鍛	鍛	鍛	鍛
138	酒	×	= 劉瓛曰	日	口	口	日	口	口	口	口
139	滌	3	= 灌溉祭器也	滌	溉	溉	溉	溉	溉	溉	溉
140	滌	○	= 帝牛在于滌	牲	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛
141	滌	3	= 滌官名	宮	官	官	官	官	宮	官	官
142	滌	1	養帝牡之舍也	牲	牡	牡	牡	牡	牡	牡	牡
143	汁	×	謂漉秬鬯以釀酒也	漉	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦
144	汁	○	= 謂漉秬鬯以釀酒也	醖	釀	釀	釀	釀	釀	釀	釀
145	汁	×	= 天時雨汁	大	大	大	天	大	大	大	大
146	洄	1	在三部	欠	三	彡	彡	彡	彡	彡	彡
147	漱	×	= 漱盪口也	日	日	日	口	日	日	日	日
148	淬	×	淬割輪淬	割	割	割	割	割	割	割	割
149	淬	3	= 郭璞曰[璞]	郭璞曰	郭<璞> 曰[璞]	郭<璞> 曰[璞]	郭<璞> 曰[璞]	郭<璞> 曰[璞]	郭<璞> 曰[璞]	郭<璞> 曰[璞]	郭<璞> 曰[璞]
150	沐	1	天子之縣内	旧	内	旧	旧	旧	旧	旧	旧
151	浴	×	瑜龜屬反	蜀	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬

4.3. 考察

まず、調査した範囲で影印と模本が符合している箇所数は、古逸本 44、高山寺本 72、山田本 82、森立之本 70、伴信友本 74、そして島田本 96 であった。また、伴信友本から派生したものは黒川本 67、田澤本 89 であった。島田本が他の江戸期写本と違っていても、一点一画の違いか、影印に符合するかのどちらかが多い。

本稿で調査した範囲で最も良く影印と符合するのは島田本だが、025, 056, 067, 071, 072, 074, 092, 103, 104, 107b, 126a など他の江戸期写本と同様に原本から異なる部分があることから、図 2(d)のように島田本と他の江戸期写本に共通する模写本が存在したと推測される。

それでは、この共通の祖本の様子を知る材料として島田本が最適だろうか。他の江戸期写本は全て影印と異なるけれども島田本のみ影印と符合するものは 21⁶ある。これに対し、他の江戸期写本の中には影印と符合するものがあるけれども島田本は異なるという状況はこれより多く 26⁷ある(他の江戸期写本は全て影印と符合し、島田篁村本のみ異なるという状況は 7)。従って、島田篁村本を他の模写本より優先すべきとは言い難い。

今回調査した範囲では島田本が最も良く影印と符合する結果については、伴信友本から派生した田澤本が島田本に次いで符合することが参考になる。田澤本は 011, 013, 016, 021, 028, 029, 051, 060 などの箇所伴信友本よりも影印に近い。これらは、伴信友本で「尔雅」を「尔雅」としたもののや、「自」を「白」とするなどの一点一画レベルの誤りについて修正したものが多いためである。島田本に至る系列も、その祖本を誤写も含めて忠実に模写したのではなく、途中で修正が加わったと見るのが自然であろう。

他の模本では全て文字が書かれているが、島田本だけが抜けているものとして 012a, 012b がある。虫損も書かれていないことから、底本の文字を同定しきれず、後から書き込むために空格を残したが、結局そのままになったものと思われる。このような例からも、島田本に至る系列の中で、見たものをそのまま描くのではなく、文字を同定したうえで模写しようとした段階があったと思われる。

4.4. 玉篇真本水部攷証について

ここで、2020 年に画像が公開された海保漁村の『玉篇真本水部攷証』(以下、『攷証』)について触れておきたい。攷証は模写本ではなく、巻 19 のうち 26 行部分のみを宋本玉

⁶ この箇所は綴じのノドの位置にあるが、綴じが深く字形を確認できなかった。

⁷ 高山寺本、山田以文本、森立之本、伴信友本、島田篁村本が全て原本と異なるのは 49 か所ある。

⁸ 011, 013, 029, 033, 043, 044, 046, 064, 083, 089, 098, 103, 107a, 107c, 119, 120, 130, 137, 138, 145, 147.

⁹ 012, 012a, 012f, 022, 023, 024, 026, 036, 041, 045, 050, 051, 062a, 070, 073, 086, 094, 096, 108, 109, 111, 124, 127, 142, 146, 150.

篇や説文、廣韻と比較し考証したものである。島田は海保に漢学を学んでいるが、島田は天保9年生まれで、海保が高山寺にて玉篇を模写したのは天保年間末¹⁰であることを考えると、島田が海保に学び始めた段階で既に『攷証』は成っていたと思われる。『攷証』の見出し字の順序から、材料とした写本¹¹は丙甲乙丁錯簡を持っており、海保も錯簡に気づいている¹²。26行部分が断裂して尊勝院から逸出した後、その部分だけの写本が流通して同様の丙甲乙丁錯簡を起こすとは考え難く、26行部分で打ち切る理由はいま不明だが、他の江戸期写本と同様に127行部分も含む写本を参照したと考えるのが自然であろう¹³。

すると、海保が用いた資料と島田本の錯簡状況は無関係で、島田は新たに資料を渉猟して得たと考えるべきだろうか。浜田2008での調査においても、現存する写本が全て江戸時代の文人の交友関係に対応付けられたわけではないので、そのような未発見の資料の可能性を完全に棄却はできない。しかし、島田は柏木とほぼ同年代であったことを考えると、既知の写本に不満があったとしても、別系統の原本玉篇の写本を手できたと考えるのは、仮定としてはやや強引に感ぜられる。

鈴木ほか2020では除外しているが、丙甲乙丁錯簡を持つ写本を再構成した可能性は無いだろうか。注文が繋がらないことを認識した事例はあるが¹⁴、正しい順序を想定して再配置した事例はないと考えてきた。しかし、『攷証』は断片丙末から連続している管の「沫也」が断片乙の後に見えてと指摘しており、断片丙・丁を再接続する手がかりを与えている¹⁵。丙甲乙丁錯簡を含む写本から、断片丙・丁の接続を優先して断片甲・乙の部分を外すという考え方も生じうると思われる。

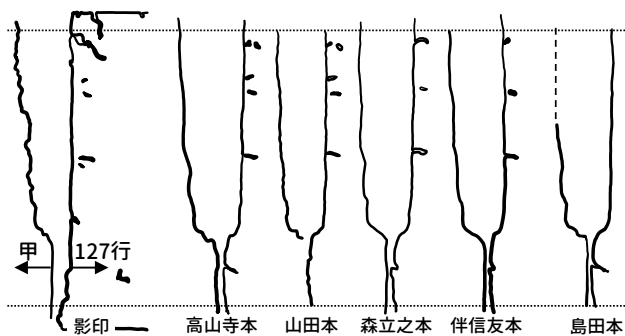


図2: 断片甲冒頭(各左)と127行部末(各右)の断裂模写

上下の点線は文字が書かれている範囲の天地を示す。原本の2つの断裂は独立な事象なので非対称だが、島田本以外は別位置に模写されるので対称に見せる動機が無いに関わらず、対称的になっている。

図2に示すように、断片甲冒頭と127行部末の断裂は原本写本本では非対称だが、多くの模本は対称的になっている

る。このことも断片丙・丁部を接続するために外した断片甲・乙部分を末尾に移動させる発想に繋がるかもしれない。

5. 小結

5.1. 島田本の系統について

本稿では、原本玉篇の巻19の江戸期写本のうち、他の江戸期写本と錯簡の状況が異なる島田篁村本について、小助川1991で報告された影印・古逸本・高山寺本に違いがある部分165箇所を調査し、また既知の江戸期写本である山田以文本、森立之本、伴信友本と比較した。その結果、島田本のみが影印に符合する箇所が最多であった。しかし、島田本のみが影印に符合する箇所よりも、島田本のみ影印と異なるという箇所のほうが多いため、島田本が古い状況を最もよく伝えるとは言い難い。また、他の江戸期写本が共通して影印と異なる箇所でも、島田本も異なっていることが見られるため、原本より後に共通する祖本があったと見るのが自然である。

5.2. 字形差の分類とデジタルテキストについて

小助川1991では調査した差異に関して、影印と高山寺本の間には誤写と思われる字体の異同はあるが、それらは一点一画の違いなどによるもので、古逸本のように全くの別字での差し替えや、空白に文字を補うような改変は高山寺本には見えないことを明らかにしている。本稿で調査した他の江戸期写本でも、基本的には一点一画の違いなどからくる字形差しか見当たらない。そのため、差異が字体差なのか、別字への差し替えなのかに関する分類は行わなかった。しかしながら、「雅」「稚」に対して「稚」「雅」などのどちらとも言えないような字形が現れ、さらに伴信友本・黒川春村本・田澤仲舒本の間でも底本に従わない状況が多いことを考えると¹⁶、これらを詳細に区別して明朝体を作字する意味は小さいであろう。

また、『攷証』は既に宋本玉篇と原本玉篇で見出し字字形が異なることを指摘している。海保は「涑」が原本玉篇では「浦」となっていることについて訛りと考えた¹⁷。実際、大徐本説文小篆を見る限りは「涑」に作るのが自然と思われるが、篆隸萬象名義の字形も「浦」であることを考えると¹⁸、尊勝院旧蔵本が特に訛ったものではなく、原本玉篇や篆隸萬象名義の祖本となった玉篇は「浦」のように作っていたものと思われる。鈴木ほか2020では見出し字と注文で字体意識が異なる可能性を指摘しているが、本稿でも「涑」(107c, f 参照)のように見出し字と注文の字体が必ずしも一致しないものが見つかった。また、本稿では模本間の差に注目したため表には含めていないが、見出し字では「沈」とするが、注文ではほぼ全て「沉」で表記している

¹⁰ 海保漁村は天保13年に小島素素とともに高山寺を訪問し、玉篇の冒頭を模写したことが『河清寓記』に記録されている(浜田2008参照)。伴信友本の自跋に天保6年の年記が見え、狩谷斎斎『箋注和名類聚抄』(文政10年)に「鈔卷子古本玉篇五卷」を所持することが書かれているので、この頃既に海保は巻9,18後分,19,27後半(石山寺所蔵分の後半)の写本を確認できており、巻27前半(高山寺所蔵分)を確認するために訪れたと思われる。

¹¹ 「巻本」と呼ばれることがあり、卷子装だったと思われる。

¹² 断片丙末の「瀑」字の注文は断片丁冒頭に続くが、その切れ目の「沫也」について「在湛字下」(『攷証』は断片乙の「湛」は独立した見出し字を立てず、断片甲末の「湛」字に詰めている)と書き加えてあることから、海保は断片丙・丁が本来繋がっていたことに気づいていたことがわかる。

¹³ 現存する江戸期写本は全て丁部と127行部分が隙間無く書かれており(袋綴じのものは全て同一頁内に連続して書かれる)、断片丁で考察を打ち切る積極的な理由が無いことには簡単に説明がつかない。しかしながら、断

片丁は2行しかないので、「26行部分だけの写本」から2行だけ断裂して錯簡を起こすということはさらに考え難い。

¹⁴ 足代本は断片丙→甲境界、乙→丁境界を認識した書き込みがみられるが、断片丙部と丁部の関係についての書き込みはない(鈴木ほか2020)。

¹⁵ 断片甲については「涑 卷本剥爛按説文涑……」と書き、冒頭の破損については書くが、断片丙部より前にあった管といった議論はされていない。

¹⁶ 「雅」の字は大半が「尔雅」「廣雅」の典籍名として用いられるので、誤字があったとしても、読解に実質的な影響は無かったと思われる。

¹⁷ 海保は「涑、卷本作浦、恐涑之訛」と書く。第3葉左頁の最終行を参照。

¹⁸ 高山寺本篆隸萬象名義では「浦」が2か所出てくるが、一方は「配□反。布也、水濱也、水涯也。」と注されることから、現在通用の「浦」と判る。もう一方は「所革反。小雨落也。」とされており、ここで議論している「涑」を指していると考えられる。

などの例がある。呂浩『《玉篇》文献攷述』などではこれらを正規化しており、元の字体との関連付けにやや難がある¹⁹。原本玉篇の巻ごとの字体意識を比較するような用途も考えた場合には、そのような正規化はやや強すぎるため²⁰、IVD への字形追加を検討することが望ましい。ただし字形の通用性を十分に検討しなければならない。

たとえば「決」に対する「決」の字形について、見出し字をこのように作る模写本の中でも、注文の中では「決」「決」「決」などが混在しており、「決」は通用性があるものなのか、単に僻字ゆえの訛りとすべきなのかが即座に判断できない²¹。しかし、おそらく底本や書写の時期が異なる巻 22 でも²²、「映」を「映」のように書きすることから、「央」を「央」のように作るものはある程度通用性があったと考えられる。「決」も「映」も他の注文では書かれないので、このような検討をするには「原本玉篇の内部で同じ図形部品を含む他の文字」を検索できるような道具が必要である。

現在、ISO/IEC 10646 のCJK 統合漢字には古逸本から作字したもの²³がいくつか提案されており、仮に IVD に追加するとしても²⁴どの文字を基底符号とするか検討するためには、今後の標準化動向の観察が重要である。

謝辞

本研究は科研費課題番号 16K004600A, 19K12716 の成果を含みます。資料をご提供下さった浜田秀先生、大居司様、開発中の原本玉篇のデジタルテキストの閲覧を許可下さった池田証壽先生、劉冠偉先生、李媛博士、『攷証』のデジタル画像を公開してくださった関西大学アジア・オープン・リサーチセンターの皆様、断片甲部の焼亡に関する情報をご教示くださった中山陽介様、標準化動向に関する情報をご教示くださった永崎研宜先生、王一凡様、本稿の動機づけを下さった馮桂芬博士の皆様には深く感謝いたします。

参考文献

池田証壽:「平安時代漢字字書総合データベース – 現状と課題 2014 夏」, シンポジウム『漢デジ 2014: デジタル翻刻と未来』講演資料 (2014-08-05), <http://hdl.handle.net/2115/59207> (2021/04/19 閲覧)。

池田証壽:「高山寺蔵『顧野王玉篇水部之缺』(影印)」, 『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集(平成 28 年度)』, 2017, pp. 3-5。

池田証壽: 平安時代漢字字書総合データベース, <https://hdic.jp/> (2021/04/19 閲覧)

大居司:「原本玉篇をめぐる新発見とふたつの呼びかけ」, 日本漢字学会 學會通信『漢字之窓』(ISSN 2434-933X), 第 2 巻, 第 2 号 (2020/12), pp. 46-48。

岡井慎吾:『玉篇の研究』, 東洋文庫論叢 第 19 (昭和 8 (1933)), doi 10.11501/1147873

海保元備:『海保漁村自筆稿本 玉篇真本水部攷証』, 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター, <https://www.iif.ku-orcas.kan-sai-u.ac.jp/books/205454712> (2021/04/19 閲覧)

柏木探古:「玉篇巻 18 後分」跋文, 探古書屋(明治 15 (1882)), doi 10.11501/1087731, 跋文は <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1087731/24> (2021/04/19 閲覧)

川瀬一馬:「玉篇水部の断簡に就いて」, 『椎園』, 第 1 輯(昭和 12 (1937)), pp. 1-3. 断片甲部の写真『古筆 玉篇水部断簡(全幅)』は本文中ではなく巻頭にあるので、遠隔複写申し込み等の際には注意されたい。

川瀬一馬:「安田文庫自責悔悟の記」, 『かがみ』, 31 号 (平成 6 年 3 月号 (1994)), pp. 118-148。

小助川貞次:「高山寺蔵『顧野王玉篇水部之缺』について」, 『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集(平成 2 年度)』, 1991, pp. 79-92。

鈴木俊哉, 浜田秀, 大居司:「原本玉篇の江戸期写本群: 巻 19 水部について」, 総合科学研究, 1 巻 (2020), pp. 59-82, doi 10.1502/750558

高田時雄:「中国学 わたしの一冊 『玉篇』 雑記」, 『未明』3 3 号(2015-03), pp. 109-122, doi 10.24546/81012077

高田時雄:「顧野王原本玉篇水部殘卷について」, 『敦煌寫本研究年報』12 号(2018-03-31), pp. 165-174, doi 10.14989/DunhuangNi-anbao_12_165

東方文化學院:『玉篇: 古鈔本』, 東方文化叢書 第 6 (昭和 7-1 0 (1932-1935))。

長澤規矩也:「原本古寫本断簡の行方」, 『書誌學』第 14 巻第 4 號(昭和 15 年(1940)4 月)。本稿では長澤規矩也著作集 4 巻, pp. 28-31 によった。

浜田秀:「原本玉篇の近世写本群と書誌学的ネットワーク」, 『山辺道』51 巻 (2008-02), pp. 37-72, <https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/rep-ository/metadata/3137/> (2021/04/19 閲覧)

羅振玉:『原本玉篇殘卷』(1916-1917)。巻 09 早稲田大学現蔵部分は 1916 年, 巻 09 京都国立博物館現蔵部分及び巻 24, 27 は 1917 年発行。後者は大居司氏蔵本のデジタル画像が Internet Archive で公開されている。 <https://archive.org/details/yuanbenyupiancanjuan1917luo> (2021/04/19 閲覧)

黎庶昌:『古逸叢書』(光緒 8-10 (1882-1884)), 原本玉篇部分は国会図書館デジタルライブラリで公開されている。 doi 10.11501/2552999, 10.11501/2553000, また別の画像として doi 10.11501/2598256, 10.11501/2598257。

呂浩:『《玉篇》文献考述』(上海人民出版社), 2018, ISBN 978-7-208-15291-5。

¹⁹ 「浦」に関しては「漑」で正規化しており古逸本か宋本玉篇に従ったものと考えられるが、「沈」に関しては「沉」で正規化しており宋本玉篇に従うわけではないので、規則がはっきりしない。

²⁰ たとえば、巻 18, 19 では「深」を大半「深」の字形で書くが、巻 22 では「深」の字形で書く。

²¹ 史的な文字データベース連携検索システム(<https://mojiportal.nabunken.go.jp/>)で「決」を検索しても明確に「決」に相当する字形は出てこないが、これはそもそも「決」が広く使われるものではないことも関係があるだろう。

²² 岡井 1933 は尊勝院旧蔵本だけは説文を引くにあたり字義だけでなく字形についても引くなどの違いがあることを指摘している。鈴木ほか 2020 の巻 18 の用部末に見える「由」様字についての議論も参照されたい。

²³ CJK 統合漢字拡張 G 以降、中華民国教育部異體字辭典(<https://dict.variant>

[s.moe.edu.tw/](https://www.moe.edu.tw/))にみえる異体字を ISO/IEC 10646 への追加する提案が審議されている。ただし異體字辭典の見出し字として他の古辞書と統合整理されたものから提案しているため、原本玉篇の全ての見出し字について統合の可否が審議されたと言えるのかは不明確な状態である(注文にしか見えない字は提案されていない)。また、異體字辭典は原本玉篇の材料として古逸本を用いているため、この審議材料も基本的には古逸本の字形に基づく。

²⁴ CJK 統合漢字に提案されている異體字辭典の見出し字は全て CNS11643 規格に個別の文字として追加されると思われる。しかし、現在では ISO/IEC 10646 への漢字追加で原規格分離は適用されないため、CNS11643 では別字符号化されていても、多くの文字が IVD に登録することが望ましいとして原案から除外された。今後、提案元の TCA がそれらを IVD に追加するかははっきりしていない。

正誤表

下記の箇所に誤植がございました。お詫びして訂正いたします。本稿では外字使用部分を赤字で印字しておりましたので、この正誤表でもそれに従っております。正誤部分の表示のための赤字ではないことにご注意ください。

訂正箇所	誤	正
2 ページ 3.1 節 箇条書き 第 1 項目	□～湛の 11 行、見出字 10 字	冷～湛の 11 行、見出字 10 字
5 ページ 行 107b カラム 6	□	濶
5 ページ 行 107c カラム 1	□	濶
5 ページ 行 107d カラム 1	□	濶
5 ページ 行 107f カラム 5	減□也	減濶也
5 ページ 行 107f カラム 6	找□	找濶
7 ページ 脚注 18	配□反	配戸反
8 ページ 謝辞 最終行	桂芬	先思